

 書評

河村満, 山鳥重, 田邊敬貴 著
 山鳥重, 彦坂興秀, 河村満, 田邊敬貴 シリーズ編集
 《神経心理学コレクション》**失行** [DVD 付]

柴崎 浩

臨床神経学の権威 3 名が「失行」を語る

本書は、わが国におけるこの方面のエキスパートの先生方 3 人が座談会形式で率直に意見を交換して、それをかなり忠実に文章化したものであり、これまでに失行に焦点を絞った著書がないこともあって、極めてユニークな本になっている。神経心理学のなかでも行為は言語に次いでヒトの最も本質的な機能であるにもかかわらず、その障害の発生機序と生理学的基盤は最も謎に包まれている領域である。本座談会では、河村満先生が種々のタイプの失行をビデオで提示して、それに対して山鳥重先生と今は亡き田邊敬貴先生が意見を述べ、河村先生が説明を加える形式をとっている。3 人の先生の特徴がよく現われていて、河村先生の豊富な経験に裏打ちされた鋭い観察眼と、山鳥先生の理論に裏打ちされた卓越した洞察、それに田邊先生の独特な解釈とが統合されて、読んでいて各先生方の表情まで見えるようである。特にこの領域は、その現象を言葉で説明してもなかなか理解しにくいことが多いが、その点本書では河村先生が集められた典型的な失行の貴重なコレクションがビデオで見事に示されており、文字通り「百聞は一見にしかず」である。

脳機能が高次になればなるほど、現われる症候にはかなりの個人差がみられ、また一人の患者でも一種類の失行ではなくて、たとえば観念性失行と観念運動性失行の要素が混在あるいは重複することもまれでないと考えられる。このような場合に、観察された現象を過去に記載された概念に当てはめようとすると困難を感じることが多く、とすれば用語を弄ぶことになりかねないが、本書では失行の代表的タイプについて明確に定義解説してあるので、上記のような混乱を防ぐのに役立っている。特に本書では、各章のサブタイトルとして、「ふれる」、「つかう」、「つかむ」、「まとう」、「はなす」、「してしまう」などの日常動作に対して平易な表現が用いられていることは、その理解と分類に非常に有効と考え

られる。

種々の変性性神経疾患の分類が比較的明確になってきた今日では、血管性局所傷害によって生じた古典的な失行に加えて、広汎な高次脳機能障害に重畳する形で失行がみられることが多い。本書ではそのような変性疾患としてアルツハイマー病、ピック病、皮質基底核変性症などが取り上げられているので、これらは実際の診療に役立つものと考えられる。特に失行に関しては、近年注目されている前頭側頭葉変性症という広汎な概念が重要な位置を占めることが想定される。

種々の失行症候を理解するには、やはりその背景にある発症機序の解明が重要であることは、本座談会で繰り返し述べられている通りである。将来的には、近年著しく発展した神経科学と脳機能検索技術の発展によって得られた知見との対比、また臨床神経生理学的なアプローチとの併用によって、この方面の理解がもっと進むことが期待される。特に、脳磁図や種々の機能イメージング法を用いた機能局在と、コヒーレンスをはじめとする種々の領域間機能連関 (functional connectivity および effective connectivity) の知見は失行の理解に直結した情報を与えてくれることが予想される。この座談会が次に企画される時点では、そのような方面からの参加も興味深いものであろう。

以上、この道の権威者である 3 人の先生方の座談会はまさに一読に値するものであり、いまから臨床神経学を学ぼうとする人はもとより、この方面に経験豊富な専門医にも自信をもって薦められる書である。特に、理屈っぽい教科書に比較して、口語体になっている点、気楽に親しく読めることが本書の大きな特徴である。

(京都大学名誉教授/医仁会武田総合病院顧問)

●A5 152 頁 2008 定価 5,250 円(本体 5,000 円+税) 医学書院